



Title	『張家山漢墓竹簡〔二四七号墓〕』解説
Author(s)	福田, 一也; 草野, 友子; 金城, 未来
Citation	中国研究集刊. 2008, 47, p. 78-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61267
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』解説

福田一也 草野友子 金城未来

序言

本稿は、『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』（文物出版社、二〇〇一年）所収の主要六文獻を解説したものであり、「第一部 張家山漢簡解題」、「第二部 張家山漢簡関連文献提要」、「第三部 張家山漢簡『蓋廬』研究概況」の三部よりなる。

一九八三年、湖北省江陵県張家山二四七号墓より竹簡一千二百三十六枚が出土した。該墓は前漢初期の造宮と推定されており、副葬品、並びに同時に出土した「曆譜」の記載から、被葬者は下級官吏で、呂后二年（前一八六年）、或いはその後ほどなく死去したものとみられている（注一）。その後、整理小組による解説・整理を経て、出土した竹簡は以下の八種に整理された。

一、曆譜（墓主の略年紀）

二、『二年律令』

三、『奏讞書』

四、『脈書』

五、『算数書』

六、『蓋廬』

七、『引書』

八、遣策（副葬品の物品リスト）

法制史料である『二年律令』『奏讞書』、医学関連書の『脈書』『引書』、古代の数学書である『算数書』、兵書の『蓋廬』など、竹簡の内容は多岐に渡るが、これらは何れも実用書としての性格をもつ文献であると言える。右記の文献に対する写真図版と釈文とを掲載した『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』（以下、『張家山』と略称）

が文物出版社より刊行されたのは、二〇〇一年のことであつた。ただし、これに先行して釈文が公表された文献もあり、また二〇〇六年には釈文の修訂本も出版されている。したがって、現在では研究の基礎資料となる釈文は、新旧複数が存在する複雑な状況を呈しており、研究を進める上で注意を要する。そこで以下、簡単にその経緯を記しておく。

①『文物』誌上における釈文の公表（写真図版なし）

「張家山漢簡『脈書』釈文」

『文物』一九八九年第七期

「張家山漢簡『引書』釈文」

『文物』一九九〇年第十期

「江陵張家山漢簡『奏讞書』釈文（一）」

『文物』一九九三年第八期

「江陵張家山漢簡『奏讞書』釈文（二）」

『文物』一九九五年第三期

「江陵張家山漢簡『算数書』釈文」

『文物』二〇〇〇年第九期

②釈文・写真図版の公開

『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）』

（文物出版社、二〇〇一年）

③二〇〇一年釈文の修訂本（写真図版なし）

『張家山漢墓竹簡（二四七号墓）（釈文修訂本）』

（文物出版社、二〇〇六年）

④赤外線技術を用いた『二年律令』『奏讞書』の補訂版

彭浩・陳偉・王藤元男主編『二年律令与奏讞書——張家山二四七号漢墓出土法律文獻釈読』

（上海古籍出版社、二〇〇七年）

『文物』一九八五年第一期に、「江陵張家山漢簡概述」（以下、「概述」と題する各文献の概要を記した報告書が掲載されて以降、①に掲げた『脈書』『引書』『奏讞書』『算数書』の釈文が続々と『文物』誌上に公表された。これらは釈文のみの公表で、写真図版の掲載は②を待たねばならなかったが、これを機に上記の四篇に関しては早々と研究が開始されていった。（ただし、『文物』釈文と『張家山』釈文とは、文字の判読に異なる箇所もあるので注意が必要である。）これに対して『二年律令』と『蓋廬』は、②の刊行によつて初めてその全貌が明らかとなり、この時点から研究が始まる。このような釈文の公表時期の違いは、それぞれの研究の進展にも大きな影響を与えることとなる。

さらに、二〇〇六年には、②の釈文を修訂した③が刊

行され、また『二年律令』『奏讞書』に関しては、二〇〇七年に赤外線技術を用いて再度文字の判読を行った④も刊行されている。したがって、今後、張家山漢簡に対する研究を行う際には、②を基礎としつつも、③の修訂本、及び『二年律令』『奏讞書』については④をも参照する必要がある。

先述の如く、張家山漢簡の内容は多様で、複数の研究領域を跨ぐため、全体を概観するのは非常に困難である。各文献の概要を示した前掲「概述」も存在するが、その情報は発掘当初のものであるため、研究が進んだ現在から見ると不十分な点も少なくない。また、『張家山』「前言」における解説は簡略すぎて、各文献の具体的内容を把握するには物足りない面がある。より手軽に、且つ適度に全体を見渡せるものがあれば有益であろう。こうした要請に応えようとしたのが、本稿の「第一部 張家山漢簡解題」である。

続く「第二部 張家山漢簡関連文献提要」では、各文献の内容をより深く知ろうとする際に手掛かりとなる研究書を紹介した。ただし、既発表の論文及び著作は相当量にのぼる。したがって、ここでは専著の中でもとりわけ注釈や口語訳等、基礎的研究を含むものを選んで紹介

することにした。

最後の「第三部 張家山漢簡『蓋廬』研究概況」は、『蓋廬』に関する現在までの研究を整理したものである。兵書としての性格を持つ『蓋廬』は、主に思想研究の分野で取り上げられるべき文献だが、他の諸篇に比べて認知度が低く、日本ではほとんど研究されていない。そこで特にこれを取り上げ、紹介の意味も込めて、『蓋廬』の研究状況を記すこととした。

なお、第一部は金城未来、第二部は草野友子、第三部は福田一也が担当したが、単なる分担作業ではなく、それぞれに協力したところも多い。本稿がこれから張家山研究に取り組む方々の一助となれば幸いである。

(福田一也)

注

(1) 同時に出土した「曆譜」には、漢の高祖五年(前二〇二年) 四月から呂后二年(前一八六年) 後九月までの各月における朔日の干支が記されている。なお、発掘状況の詳細は、荊州地区博物館「江陵張家山三座漢墓出土大批竹簡」(『文物』一九八五年第一期)を参照。